

University of the Ryukyus Library Bulletin Vol.27 No.1 Suppl.(No.101) January 1994

〔資料紹介〕

琉球大学附属図書館伊波普猷文庫蔵

『冊封使渡来之時之覚書』

池宮 正治

本資料は琉球大学附属図書館伊波文庫に所蔵されている卷子本で、表に「冊封使渡来之時之覚書」とある。しかし内容は冊封使を迎えたときの覚書ではなく、ほぼ年中行事のように行われる勅書迎えの儀礼を定めた、いわばマニュアルである。現在知られている資料で勅書迎えについてこれほど詳しく書かれたものはない。それ故勅書迎えの儀礼の全体を知ることの出来る極めて貴重な文献である。成立年代は不明だが、中に先規の例として乾隆五十八（一七九三年、同六十（一七九五）年の年号が出ているので、その後のものであることがわかる。

琉球王国は中国を宗主国とする冊封国であった。つまり国産の紅銅や硫黄、錫（白銀）を献上するために、進貢船という船二艘に正使と副使正議大夫らが乗り込み、北風に乗って先ず福州に着き、旅装を整えて北京をさして上り、歳暮に凍てつく北京に到着して、元旦の朝賀の式冊封国の外国の使臣とともに列席し、はるばる持ち運んだ

例の産物を献上する。琉球の使者は琉装の色衣冠（正式な冠と衣装）を着用して朝鮮の使者に次いで、天安門、午門と進み、太和門の右（向かって左）の貞度門から入り、東（西班牙の末）太和門より位置して、太和殿前を埋め尽くした華やかで壮大な朝拝の儀式に列席する。鄭章観等の見聞を記録した「琉客談記」によると、その儀式は早朝（戸部良熙の『大島筆記』によると丑の刻、午前二時ごろから入る、とある）、茫洋としてハッキリ見えない時刻から始まり、日が昇って漸く玉座が見える。しかし皇帝の顔は遠いこともあり依然明瞭ではない。その後内宮の乾清宮で親しく皇帝に拝謁、国王の書簡（上表文）を捧げ、皇帝はまた国王の安否を問うのである。そして皇帝の書簡である「勅書」を奉じて進貢使は帰国するのである。

那覇港に到着した進貢船は皇帝の名代である冊封使を迎えるように（冊封の時には国王が那覇港まで出向く）、三司官・親方・申口吟味役・正副使、久米村の長史や引礼の都通

事や秀才、それに進貢船の乗り込みの役者等が、王国の第一門とも言うべき通堂(迎恩亭)に踞居して恭しく出迎える。『琉球国由来記』「勅書迎」に、

勅書、御城へ上る時、通堂に於いて、勅書を龍殿に請け、且つ欽賜の緞疋も同に載せ諸官迎拜する有り。通堂より法司官・紫巾官以下諸官、先備、(下階は先上階は後也)御使者・渡唐官員者、後備、(但し品次第也)登城有り。

聖主、玉庭に於いて、南方御轎倚に御座まし、龍亭浮道に居る時礼拝したまふなり(中華の礼法也)。

御使者、勅書を奉じて法司官に伝ふる時、法司官捧げ奉り、聖主御戴くあり。欽賜の緞疋の内一疋、御使者、之を採り法司に伝へ、且つ法司奉じ、聖主御戴くあり。余りの当衆次第に大庫理に入る也。此の時先代は聖主、真正面の御轎倚御座、按司部・勅書御迎への人員、玉庭に於いて御拜之(これ)有る也。御祝儀として御子部・思弟部・三司官、御花・御酒を献上する也(片仮名を平仮名に、返り点を読み下しにするなど和らげてある)。

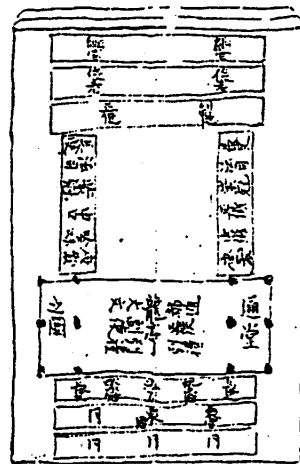
とあって、「勅書迎」の概略はこれまでもほぼ分かっている。しかしながら本資料の価値はその詳細が伺えることである。

宗主国の皇帝が発する勅書は文字通り下へも置かない至尊の文書であって、進貢船の居住部分である後部艙屋の上部に安置してあつた。

そこには航海の守り神でもある天妃(菩薩、媽祖)も祭られている。通常であれば、着船後上陸するときには始めに天妃を龍亭に載せ、これをかたがて天妃宮に安置するのが、常の風景である。その道々喧嘩(チャルメラ)や銅角、喇叭などを中心に銅鑼や太鼓を交えた賑やかな行進があつて、これは江戸上りの際の行列の時にも、また福州へ到着した琉球の使者が役所巡りをするときも、さらには北京上りの途次にもこうした行列の際演奏する路次楽は欠かせないものだった。こうした迎接のしかたは古いもので、朝鮮李朝実録の西暦一四五七年の条に、中国の勅書や朝鮮の書契(書簡のこと)が琉球に到り、初めて船から下るす時には、武装した兵士を率いて出迎え、輿轎(龍亭)にこれを安置し、旗や幟を立てて儀仗とし、鼓鉦や吹奏楽器を吹き鳴らしつつ王宮に迎え入れる。王は赤い唐衣装を着、冠を被りこれを礼拝して、声を挙げて読み上げる、とある。

本資料によると、艙屋から勅書を下るすに先立って、艙屋の勅書に対して、船員や久米村の役人たちが、最高の礼である三跪九叩頭の礼をしてから下ろし、その時には爆竹(火矢)三発を打ち放ち、三鼓(太鼓・羯鼓・鉦鼓)を打つ、とある。この火矢を放つて景気を付けるやり方も古く、天正三(一五七五)年三月薩摩へ使いたした金武大屋子一行は、宿舎から対面所までの道中を貢物を運びながら路次楽を奏し爆竹(鉄砲)を放ちつつ行進し、

通堂元記(書)た記



行列に洗滌奉り下るす候に
沙瀬に修自候に、首尾に
中途の同名船頭候を、下り候
本館候に、下り候に、勅書
沙瀬に候に、勅書
本館候に、三跪九叩頭、沙瀬に
本館候に、勅書
下り候に、火矢、三発、(火矢)
堂内、三跪九叩頭、火矢、

到着しては対面所の縁側に貢物を積み上げ、内に入って座楽を演奏している。

本資料でもわかるが、国王は唐衣装に着替えて、御庭の浮道（お成り道）の左（向かって右）南殿寄りに、轎倚という交脚の椅子に腰掛け、浮道方向に向かい勅書を載せた龍亭を迎える。龍亭は三台、先頭が勅書、二番目が皇帝から下賜された国王への緞子等の巻物、三番目が王妃へのそれである。これを正殿唐玻豊前の石階のした浮道に据え、その前に香案を設け、その上に正月の天拝や朝賀の時と同様龍蠟燭金花香炉を置いて、国王自ら香を焚いて礼拝する。それにつれて引礼官が「排班、班斉跪、衆官皆跪、叩頭、再叩頭」とか「上香、再上香、三上香」といった朝賀と同じような掛け声が、中国語で歌うように唱えられる。これと似た掛け声は御庭で展開される冊封の儀でも、これに続く天拝でも聞かれる。表題が「冊封使渡来の」と付いたのは勿論後代のことであるが、こうした冊封儀礼との共通項がこれを誤らせたのである。

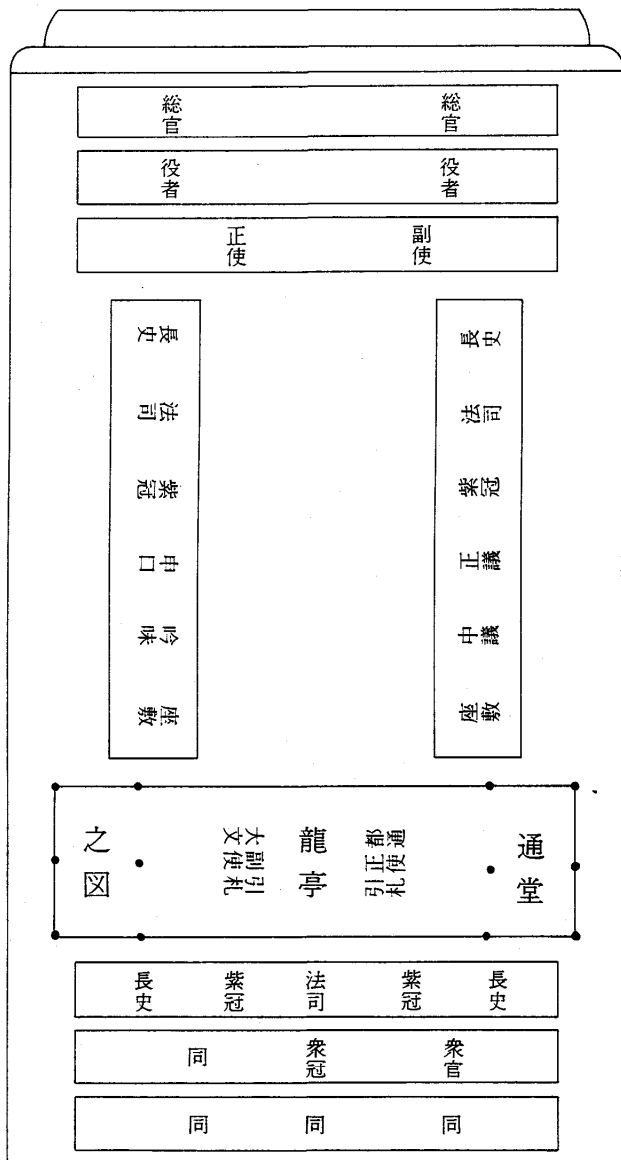
そして龍亭の中の勅書・巻物を下庫理（正殿一階）の御差床（王座）に運び、その後ろの引戸を明けて二階の大庫理へ通じる階段を登って「御内原」へ運ばれるとともに、国王も琉装に着替え、再び下庫理に出御、龍亭を供奉してきた人達の労をねぎらい、酒や菓子、お茶を振る舞う。身分により御差床御拝所、向拝（ごはい）、御庭に着座して「大通り」となる。

その後勅書は国王のプライベートな空間である書院の御床に飾られて、撰政や三司官といった王府の高官に披露され、長史が中国語で読み上げた上で、右筆に渡され保護を命じられる。

本資料の「勅書迎」の内容は概略以上のようである。これとともに、本資料にも指示があるように、王府勢頭方の「図帳」、当方の「図帳」等を参考にして合わせ考えると、いつそ

冊封使渡米之時之覚書

通堂座配之図左記



う「勅書迎」の全容が明瞭になる。

なお本資料は裏打ちしてあり、その裏打ちの幅が十八・二寸、内のりつまり本紙が十六寸、長さが六尺六寸三寸、軸はない。

文中括弧（ ）内は本資料にある朱筆による補筆であり、括弧「 」内は墨書による小書で、一種の注である。また虫書欠落等による不明字は□にした。また他に適宜句読点、行替えをしてある。

一 行列引札通事・秀才下知ニ備立、御鎖之側・日帳主取ぬ首尾申出候事。
 一 中途警固る勢頭・筑登之・平等所役人相合、筑佐事ぬ下知方相勤させ候事。
 一 御船艙屋之内、勅書相読、勢頭・大夫役者中三跪九叩頭之御拜有之。北京大通事、勅書捧、御船より下候時分棒火矢三筒打、三鞍仕、通堂崎より引鞍金鞍旗路次楽、左右二相備先立通候。勅書者大通事より竜亭ニ乗上、其左右ニ勢頭大夫相立、竜亭前左右二通事式人、秀才式人相立、通事拜唱御拜有之候事。
 一 右旁相濟、四ツ頭時分長史方図帳之通相備、通堂打立候事。
 但、崇元寺之前下馬不仕。
 一 唐玻豊御戸閉候様下庫理当より御近習ぬ申達候事。
 付、御規式相濟候得者御戸開候様当より御近習江相達候也。
 一 勅書、八幡之前捧来候砌、通事一人早使罷登、下庫理当江相達候得ば、三司官ぬ致案内言上有之。此時又奥書院伺公之当より唐御衣裳奉為召候事。
 付、唐御衣裳方当暇乞之時、何某相勤候付、唐三司官案内言上仕相勤候也。
 一 奉神御門開シ可申通勢頭より三司官ぬ致案内開させ候事。
 一 勅書下之御庭捧参、御巻物惣様竜亭ぬ積上、相濟候得者（供奉之勢頭一同）三司官ぬ致案内、下庫理ぬ参り、当番之三司官ぬ案内、

当御取次言上有之（候得者、則供奉之当一人御座詰之当二人、左右当之座着座仕候事。）
 一 右之言上有之刻、当番之三司官以下諸官御轎椅之御後、中頭ニシテ立備候事。
 （一当番三司官は真正面階之本、浮道二伺公、出御被遊候得者供奉仕ル。）
 一 下庫理ぬ出御被遊候得者供奉之当四人、御差床之前ニ進、御座詰之当五はい左右二下りつくばふ。当番之三司官真正面階之本浮道二伺公、供奉仕、御轎椅ぬ着御被遊候得者（三司官は御轎椅）御右ニ立、当四人御後ニ相立候事。
 （一当番之親方以下筑登之た御轎椅御座右之後中頭にして立備。）
 一 御庭出御被遊候段供奉之勢頭・下庫理、下之御庭ニ参、勅書供奉之三司官ぬ相達候得者、先備之人数并御節道具、路次楽人左右之御門より通り御庭備立、執事御道具涼傘、拜唱通事・引札秀才、勢頭大夫・北京大通事・同大筆者・両長史、御備之通竜亭相付、真正面御門ぬ入控「御迎御筵ぬ立御被遊候は、捧通」。当番之三司官より美御迎可被遊旨言上仕、御轎椅被遊立御「此時三司官当四人供奉、酒庫理大御団羽上候也」、竜亭真正面御門より勢頭大夫・長史・北京大通事・同大筆者□□御品捧来候得ば被遊鞠躬「此時大団羽御後ぬ引」、竜亭真正面末之階より三尺程間置、後は百浦添表二なし、浮道ニ居候者、如本御轎椅ぬ着御「此

時大団羽如本捧揚」。則長史老人御轎椅本ニ参り、御左表ニ立備候事。
 一 北京大筆者御規式相携候時、其当日足袋はき候也。
 一 竜亭供奉之黄御冷傘、御供真正面御門より竜亭浮道ニ居候得者、北表ニ捧候也。
 一 竜亭御備之御道具、真正面御門より入、赤御冷傘之本より浮道左右ニ順々立備候也。
 一 竜亭供奉人数左右御門より入、南表南風之御殿掛作り角より北ニ向立備、北表はせん袴之角より南ニ向立備、路次楽人は君誇より三番目敷瓦ニ立備、竜亭浮道ニ居、御轎椅御座ぬ被遊還御候は、御庭左右各御拜座ニ立備候也。
 一 竜亭浮道ニ居候得者、早速御座構之当老人、里之子た老人、花当三人御香台ぬ如凶御飭仕、通事親雲上式人、御香台左右ニ立、勢頭北京大通事竜亭左、大夫北京大筆者竜亭右ニ立備、其前ニ備後御畳式枚敷、其上赤糸縁御畳一枚、当ニ而黄縫物縁御筵一文字は御焼香台表ニ成、直に留がね差、北表廊下之前退。則三司官より御拜御座ぬ着御可被遊与言上仕、三司官・長史・当四人供奉当「此時当番之親方以下筑登之座敷迄御庭左右御拜座江立備」。御拜御座着御「此時御召御冷傘大御団羽御後ぬ引」、唱拜親雲上唱拜被遊（諸官人供奉ニ而）有之候。唱拜左ニ記。

付、供奉之三司官長史御側ニ而御拝仕候也。

排班 班齊跪 衆官皆跪 叩頭 再叩頭 三叩頭 興

一右相濟、唱拜有之。香案之本の御進歩之砌、三司官差寄、御香炉之ふた開、台之上右表ニ□、長史御香合之ふた開、捧上候ば、被遊御焼香候。唱拜左記。

付、被遊御焼香候間者御圭は御書院当ニ而捧上候也。

請詣香案前 上香 再上香 三上香 復位 跪 衆官皆跪

一御拜相濟候得者唱拜親雲上請拜勅賞唱、勢頭勅書捧、御前の上上、御頂、大夫の被下候得者、竜亭の添置、又御巻物四疋、右次第二而一疋ツ、御頂、竜亭の添置、通事親雲上・秀才唱拜、御拜被遊候。唱拜左記。

付、勅賞并御巻物御頂被遊候間は、御圭は御書院当ニ而捧上候也。

請拜勅賞 俯伏 興 跪 衆官皆跪 叩頭 再叩頭 三叩頭 興 跪 叩頭 再叩頭 三叩頭 興 跪 衆官皆跪 叩頭 再叩頭 三叩頭 興 平身 礼畢

一御拜相濟、三司官・長史・当四人、供奉、御轎椅御座着御「楽有」被遊候得者、御召付之当兩人竜亭之本の帰り、御巻物手伝仕、当番之親方以下如本御後ニ立備、早速御座之当御拜御座の御筵御畳里之子た花当ニ而御座敷取除、北廊下の引、御香台如凶北表御庭の引候。則勅書并御巻物、勢頭大夫北

京大通事・同大筆者より当の接、当請捧、御通道より御差床ニ捧参り、御近習請捧、御内原の上り候事。

付、御座詰之当兩人真正面より出、供奉之当二人、御座構之当卷人、五人ニ而手伝相勤候也。

一右相濟「供奉之当二人、御轎椅之本の立備早速」竜亭北之御庭の如凶引「此時竜亭御備之黄御冷傘引」候得者、三司官入御之言上有之、入御「楽有」、当番之三司官・長史真正面階之本迄、当四人御差床前迄供奉仕候。「此時御座詰之当兩人、如最前五はい左右二つくばふ」当番之親方以下轎椅之本より退候事。

一入御被遊、勅書供奉人数下庫理御座の御呼之段御□□頭より当拜聞仕、当兩人左右欄干ニ右之段勢頭の申渡、勢頭より三司官の相達候得者、何れも御礼、手を合退去之事。

(一当より申口取次、三司官の致案内、御印乞候事) 一当番人数并勅書供奉之諸官人、下庫理の着座仕候事。

一当より三司官の致案内、出御之言上仕、出御「楽有」被遊候得者、着座之人数御礼、手を合候。則御酒被召上候御時分、当より三司官の相達、親方の相達候得者、親方申口本座ニ而一同二御礼、手を合座末通、西表衣冠見繕、親方三番御拜所、申口二番御拜所ニ而一同立御拜仕、親方御差床の登御

礼、手を合つくばふ。其砌申口三番御拜所

ニ而一同二立御拜仕、南表美御前揃之本の参、御籠飯之御辻迦、蓋開、御打置之下二うつつふき候而押入、(御) 差床前真中、手を付、北表美御前揃之本の参、御盃御菓子盆之御辻迦、御盃包紙御盃台居、紙者懐

二入、御菓子盆共親方を伝つくばふ、親方御菓子盆請捧、台御差床御前真中ニ御酒台「樋口は御庭表ニ成シ」居御礼、手を合、当御瓶「玉かふり□つし」、君使官載シ南之庫理より捧出、君使官共申口請捧、御瓶口取紙取、君使官之上ニ置「当控座の退ク」、親方御盃台共取上ゲ、右之手ニ而捧御礼仕、申口御酌ニ而御酒次シ、御前の上つくばふ、御盃被下候得者頂、御盃台ニ居御礼、手を合、当差寄、御瓶「口取紙さし」申口より請取退去、親方御盃御菓子盆共申口より請取退去、親方御盃申口を渡、申口ニ而御打置ニ直、御辻おそひ、御差床前手を付、南表美御前揃之本の参り、御籠飯之ふた仕、御辻おそひ、親方・申口最前之通御礼、立御拜ニ而退去、本座の着御礼手を合候事。

一右相濟、三司官以下着座之人数の里之子た宮仕ニ而御酒被下、無系之座敷、勢頭座、御差床御拜所黄冠以下五はいニ而大通被下候事。

付、当番人数并渡唐人数、勅書供奉人数迄相混、位次第被下候也。 一御酒、申口座通候時分当卷人御茶湯之間の参り、御茶御時分拜合、三司官の案内、親

方々相達、当は御茶湯之間を参り、親方・申口本座二而一同二御礼、手を合、座末通筋二而衣冠見繕、親方三番御拜所、申口二番御拜所二而一同二立御拜、親方御差床登御礼、手を合「つくばふ」、其砌申口三番御拜所二而一同二立御拜、御差床前少シ北表二寄りつくばふ。当御茶捧参候得者、申口請捧「当控座を退ク」、親方を相渡、親方御丸盆一添而請取、左之手二而拘、御取蓋取、申口捧居候御菓子盆二御茶拝合上「此時楽有、御座中何れも手を付」、御丸盆前二居つくばふ。御天目被下候得者頂キ、御取蓋おそひ、申口を相渡、追付当参り、請取る。親方・申口最前之通御礼、立御礼二而本座を御礼、手を合候事。

一 右濟而御残り之御茶三司官以下着座之人数を小赤頭宮仕二而被下。入御「楽有ル」。

一 着座人数御礼、手を合候事。

一 諸家来赤頭を勢頭捧二而石ていし階二而御酒被下候事。

一 奉神御門勢頭二而閉させ、三司官を首尾申出候事。

一 御座上可申由当より三司官を案内、退去之事。

一 右御規式相濟、御書院奉行・当、奥御書院を伺公被遊御出座、長史出仕二而御座末着座、勅書丸盆請、御近習捧出御床之口を御筋仕、奉行差寄、勅書御前少シ上二而開候へば、長史差寄読上、相濟、奉行二而如本盆置、長史出仕座御礼、手を合退座候事。

一 進貢御使者於北京從皇帝様上意被成下、致帰国、国王と可相達旨勅諭御座候節は、御書院御拜聞被遊候事候間、進貢御使者致帰帆候は、右之次第早速承届兼而達上聞、勅書御拜領物御頂戴□□□御庭御規式相濟、引次右之御規式有之候事。

但、御規式の次第は乾隆五十八丑、同六十卯年例式言上写相見得ル。

一、進貢御使者迄上意被成下候節は本文之御次第無御座候也。

一 三司官一人は於御城御迎、兩人は勅書供奉之勤有之候。

一人支有之時は、供奉之勤一人二而相濟候故、足二不及候。兩人支有之砌は、一人之足、三司官座何親方を足被仰付度旨口上言上有之候事。

但、言上相濟首尾方之次第別冊有之。

一 勅書、撰政・三司官を拜見させ可申段、御書院奉行二而達上聞、勅書盆載シ奉行捧出、御書院上御座を相飾、下御座を伺公、撰政三司官拜見、長史読之、濟而奉行下之、御右筆格護申渡、首尾言上仕候事。

一 撰政三司官・御物奉行・申口吟味、御書院を参上、奉行御取次、勅書御拜領物御頂戴遊候御祝儀申上候事。

一 長史支有之、足何某を被仰付度旨物役より申出候得ば、御書院当御取次、申口二而及言上、相濟候得ば月番申口より相達候事。

一 御双紙庫(理)支有之時、申口之内何某を足被仰付度旨口上言上仕候事。

一 進貢御使者帰帆仕、早速上国被仰付、乗船以後は勅書御迎之勤、大夫一人二被仰付度旨、覚書言上有之候事。

但、言上書調様、月次言上記有之、言上相濟、写首尾方次第、別冊有之。

一 勅書御頂戴之時、例式相替候儀、又は御筆御器物御頂戴之段接貢船帰帆之節は、勅書差上候日、進貢船帰帆之節は、自分より日柄相考、兼而御書院(と)御案内仕、御使者以下船頭総官迄、表向より差上候献上物は、名書月番之申口取次差出、三司官見届、相濟候得者、自分より御書院当御取次、差上候事。

一 聞得大君御殿、佐敷御殿(とも)右御同前二献上候。尤覚書は評上所差出申候。

一 進貢御使者、才府・大筆者、土産物差上候儀、勅書御頂戴不遊内出船被仰付候節は、右御使者を御書翰渡之日差上候。尤台移二而、才府・大筆者御用繁多之砌者、御使者計差上、才府・大筆者は帰帆以後差上候也。

(いけみやまさはる…法文学部教授)

